

次世代につながる道徳教育を 協働の力で創造する

会長 永田 繁雄



令和を迎えて四年目。道徳教育の要をなす道徳科の

当初よりコロナ禍の感染拡大によって出鼻をくじかれた状況でした。しかし、各学校や各所の努力で、それが名実ともに新たなステージへと入り始めています。

そのような中、本学会の第九九回大会は、先の六月二六日、まだ対面形式は状況が許しませんでした。東京家政大学を発信基地としたオンラインにて、一四の分科会、六〇を超える日本中から熱い発表等による意見交流の中、盛会裡に開催されました。関係の皆様のご尽力とご理解に心より感謝を申し上げます。

また、大会時の総会において、本学会の新体制の審議等がなされ、承認をいただきました。私自身、実行発信力に不安は拭えませんが、本会の継続発展を共につなぐために精一杯務めさせていただきます。何とぞよろしくお願いいたします。

さて、その新たな段階の道徳教育がもつべき基軸として、私は特に次の点を心に留めたいと考えます。

- 道徳科の持ち味を一層確かめていく

道徳科は「特別の教科」としてその内容・方法等に新たな性格が付与されました。それに伴い、他の教科等と共有する教科性と、区別すべき独自性などがさらに検討されていく必要があります。それが道徳教育の可能性の開発に直結するからです。

先月の大会は、テーマを次のように掲げて臨みました。

「道徳教育を科学する」

それは、道徳科自体を客観的に吟味する筋道を広げるものになったといえます。また、本学会は「教科教育学コンソーシアム」のメンバーにもなりました。その中での議論を通しての明確化も期待されます。

● 持続可能な社会の発展に資する

道徳教育の在り方を考える

その上で、私たちは道徳教育の更なる課題に向き合わなくてはなりません。感染状況はまだ予断を許しませ

せんが、ポスト・コロナでのその役割が一層問われていくはずですが、

今秋、武蔵野大学で開催される第一〇〇回記念大会が掲げる次のテーマは、そのことに重なります。

「持続可能な社会を実現する

ために道徳教育に何ができるか」

私たちの学会は、道徳教育研究のメイン組織として、その将来展望を示す責任もあります。いわゆるSDGsへの向き合い方も含めた新たな価値観の創造が求められています。

● 誰もが豊かに生きるウェルビーイングを共に志向する

その価値観の重要な手掛かりの一つはOECDが次世代型能力の中心概念として提示するAgency(いわゆる主体能力・自己開発力など)であり、そのコンパスの描く方向はWell-being(幸福度・幸福感)です。

もとより、道徳教育の目標は「主体的」「共に」によりよく生きる「ための道徳性を養うこと」であり、誰もが幸せな生き方を希求する方向を内在しています。その重要な推進力としての道徳教育の在り方をさらに追求していければと考えています。

道徳教育の理論の根の深さと、実践の果実の豊かさを、同じ関心をもつ私たちの協働の力で力強く育んでいくことを願ってやみません。

(東京学芸大学)

学会ノート

学会会報の第1号は、2004(平成16)年10月30日の発行でした。

小野健知会長による「道徳教育の現状と課題」の巻頭言には、戦後60年が経ち、遷歴を迎えた我が国が、価値観の多様化や社会構造・経済構造の激変の中、「なすべきこと」をなし、「してはならないことは断じてしない」という信念をもち、ひたむきに自分の信ずる目的に進む人間が必要ではないかと記されておられます。

一方、この年は、長崎県佐世保市などで子どもが関わる深刻な事件が起き、道徳教育には、「生命を尊重する教育の推進」「伝え合う力と望ましい人間関係の指導の推進」が積極的に取り組むべき課題として挙げられました。このことは今もなお、大きな課題です。

時代の移り変わりを感じつつ、道徳教育の不易と流行をしっかりと押さえたいと思います。(島 恒生)



学会会報・創刊号

文部科学省における道德教育の新しい動き

「令和三年度 道德教育実施状況調査(以下、「道德教育調査」)の結果を、本年四月二十七日に公表(文部科学省のウェブページ「道德教育アーカイブ」に掲載)しましたので、その概要についてお知らせします。

「道德教育調査」は、道德科を要とした道德教育の全国的な取組状況や課題を把握することで、今後の道德教育のさらなる改善、充実を図るために必要な知見を得ることを目的として行っているものです。前回調査は、平成二十四年度に実施しましたので、今回の調査は道德の教科化後、初めての調査ということになります。

「道德の『特別の教科』化を受けた変化」(小中学校対象)についての回答結果では、「とてもそう思う」と「どちらかというと思う」の割合の合計が9割を超えている項目として「教師の意識が高まった」、「授業時間を十分に確保して指導することができるようになった」、「学校として育てようとする児童生徒像をより意識して指導するようになった」などがあります。その他の項目についても総じて非常に高い割合となっており、教科化に対して前向きな変化を認識していることがわかります(教育委員会対象も同様の傾向)。

一方で、課題と考えられる事柄も見えてきました。

まず、道德教育についてですが、「道德教育を推進する上での課題」(小中学校対象)についての回答結果では、「学校の道德教育の重点や推進すべき方向について教師間での共通理解や連携を図るための機会の確保」を課題とする回答割合がもっとも高く、次いで「家庭や地域社会との連携・協力」となっています。

次に、「特別の教科 道德」(以下、「道德科」)についてですが、「道德科の授業を実施する上での課題」(小中学校対象)についての回答結果では、「話し合いや議論などを通じて、考えを深めるための指導」、「物事を多面的・多角的に考えるための指導」、「道德的価値の理解を自分との関わりで深めるための指導」が、回答割合の高い項目の上位を占めています。また、道德科の評価については、「『道德科』の評価を行う上での課題」(小中学校対象)についての回答結果では、「評価の妥当性や信頼性の担保」、「児童生徒の学習状況及び道德性に係る成長の様子の把握」を課題とする回答割合が5割を超えています。

今回の調査結果を受け、各教育委員会と連携して「道德教育アーカイブ」の更なる充実を図るなどの対応を予定しています。

(教科調査官 飯塚 秀彦)

新役員、組織体制等が決まりました

2022年度～2024年度

役員 (五十音順)

理事

- 浅見哲也、荒木寿友、飯塚秀彦、押谷由夫、貝塚茂樹、木下美紀、澤田浩一、七條正典、柴原弘志、島恒生、白木みどり、杉中康平、鈴木由美子、関根明伸、田沼茂紀、永田繁雄、西野真由美、走井洋一、毛内嘉威、柳沼良太

監事

- 東風安生、鈴木明雄

評議員

- 秋山博正、板倉栄一郎、植田和也、尾崎正美、権田昭、齋藤嘉則、堺正之、佐々木哲哉、醍醐身奈、高原健、田邊重任、土田雄一、富岡栄、中野啓明、萩野奈幹、林敦司、平野良明、本田正道、前田哲雄、松原弘、宮嶋秀光、椋木香子、由良健一、和井内良樹、渡邊真魚

組織

会長

- 永田繁雄

副会長

- 七條正典、西野真由美、貝塚茂樹

名誉会長

- 押谷由夫

会長代行

- 柴原弘志

事務局長 貝塚茂樹

常任理事 鈴木由美子、毛内嘉威、田沼茂紀、島恒生

顧問 行安茂、高島元洋、竹内善一、廣川正昭、柴田八重子

監事 東風安生、鈴木明雄

◆常設委員会

【編集委員会】

- 委員長 鈴木由美子
- 副委員長 関根明伸
- 委員 荒木寿友、西野真由美、小池孝徳、萩野奈幹、宮嶋秀光、渡邊真魚、椋木香子、吉田誠

【企画運営委員会】

- 委員長 毛内嘉威
- 副委員長 走井洋一
- 委員 白木みどり、柴原弘志、浅見哲也

【研究委員会】

- 委員長 田沼茂紀
- 副委員長 澤田浩一
- 委員 柳沼良太、七條正典、杉中康平

【広報委員会】

- 委員長 島恒生
- 副委員長 木下美紀
- 委員 飯塚秀彦、浅部航太、高宮正貴、醍醐身奈

◆日本道德教育学会賞選考委員

委員長 七條 正典
委員 田沼茂紀、鈴木由美子、
柳沼良太、澤田浩一

◆教科教育学コンソーシアム

理事 柳沼良太
編集委員 柳沼良太
研究推進委員

◆「次世代」育成

西野真由美、毛内嘉威
走井洋一、木下美紀、
荒木寿友

編集委員会

編集委員会では、学会誌『道德と教育』の編集・発刊を行います。令和4年度から新メンバーで頑張りますので、よろしくお願いたします。

今回は、『道德と教育』第342号*（令和5年3月刊行）に関するお知らせをします。（*第341号は1000回大会記念号として令和4年11月に刊行予定）

1 『道德と教育』第342号（令和5年3月刊行）の原稿締切日は、令和4年9月30日（必着）とする。投稿資格は、日本道德教育学会会員であり、令和4年9月30日までに当該年度の会費を納入している者とする（単著、共著にかかわらず著者は本学会の会員でなければならぬ）。

2 投稿は学会ホームページ掲載の「学

会誌執筆要領・投稿規定」に基づいて行うこととする。（※令和4年4月改正。引用・参考文献の表記法を変更しているため、論文執筆時に必ず確認すること）。

3 投稿論文は「研究論文」「実践研究論文」「研究ノート」の3種類とする。

4 投稿論文原稿の字数は、本文、図、表、註、引用文献を含めて、A4版横書き10ページ以内（全ページを、1ページ40字×40行以内で作成すること）とする。

5 投稿論文には、以下の別紙を作成して必要事項を記載し、添付することとする。

別紙1：論文の種類・氏名・題目・所属・連絡先（住所、電話番号、メールアドレス）

別紙2：論文の種類・題目・キーワード（3〜5個程度）・和文要旨（400字以内）・英文題目・英文要旨・英文キーワード（英文は、編集委員会に依頼することができる）。

別紙3（該当者のみ）：投稿論文に関連する業績の報告

この論文に関連する内容の論文等（口頭発表を除く）を公表した実績がある場合、「該当の論文等の題名、掲載誌、掲載年、本論文との相違点」を報告することとする。なお、「関連する内容」とは、主題の類似する研究、同一の実践事例（授業・研修等）

や調査データ・資料を用いた分析等を指す。

投稿規定に沿わないと編集委員会が判断した投稿論文原稿は受理しない。

6 本文の註記は、「学会誌執筆要領・投稿規定」の例を参考とするものとする。

7 投稿の際には、論文原稿（4部：正本1部、コピー3部）、別紙1（1部）、別紙2（4部）、該当者は別紙3（4部）を作成し、「投稿論文チェックシート」と共に提出するものとする。審査の公平を期するため、論文原稿・別紙2及び3には氏名・所属等を記入しない。最終原稿提出の際には、電子媒体（CDないしDVD）も併せて提出することとする。ただし、投稿の際（9月30日締切）には電子媒体の提出は必要としない。

8 投稿論文原稿の提出先及びお問い合わせ先
〒739-8524
東広島市鏡山一丁目一ー一
広島大学大学院人間社会科学研究科
鈴木由美子研究室気付
日本道德教育学会誌編集委員会
TEL 082-424-7187

E-mail

pestre@hiroshima-u.ac.jp

※提出は郵送でお願いします。問い合わせはなるべくメールでお願いします。

『道德と教育』第342号の特集論文募集について

特集テーマ：現代的な諸課題に

道德教育はどう応えるか

『道德と教育』第342号では、「現代的な諸課題に道德教育はどう応えるか」をテーマとした特集を行います。特集論文は、編集委員会からの依頼論文と会員の皆様からの投稿論文で構成されています。編集委員会では、会員の皆様の積極的な投稿を歓迎いたします。なお、特集論文においても査読がありますことをご承知おきください。

新型コロナウイルス感染拡大によるパンデミックへの対応、持続可能な社会の実現、紛争の解決など、私たちは多くの課題に直面しています。これらの課題は地球規模の課題として、また今後も継続する課題として、考えていかねばならない課題です。こうした課題に、道德教育は応えることができるのか、できるとしたらどう応えればいいのか、会員の皆様とともに考えていきたいと思っております。

本特集では、現代的な諸課題を、道徳科に限定することなく広く捉え、学校全体を通じた道德教育、たとえば他教科との連携、家庭・地域との連携等、さらには環境問題、平和問題などのグローバルな視野等、多様な視点から、道德教育の今日的意義を捉え直したいと考えます。本質的な理論、実践的な解決など、会員の皆様の意見交流の場

となることを期待しています。

投稿希望者は、論文の種類を「特集論文」とし、学会ホームページに掲載の「学会誌執筆要領・投稿規定」と上記『道德と教育』第342号のお知らせを参照していただき、「投稿論文チェックシート」により投稿規定に沿っているか確認の上、上記8の提出先に郵送にてご提出ください。

(鈴木 由美子)

企画運営委員会

企画運営委員会の担当事項は、「学会の春季・秋季大会の企画・運営」となっています。基本的には各大会運営委員会の考えを尊重しつつ、春季・秋季大会の新しい在り方を、皆様と共に提案していきたいと考えております。

① 大会計画について

【令和4年度大会計画】

○第99回大会(令和4年度春季)

6月26日(日)・オンライン開催

東京家政大学(走井洋一)

大会テーマ「道德教育を科学する」

○第100回大会(令和4年度秋季)

11月19日(土)～20日(日)

武蔵野大学(貝塚茂樹)

大会テーマ「持続可能な社会を実現するために道德教育に何が出来るか」日本道德教育学会が果たすべき未来への使命と役割」

【令和5年度大会計画】

○第101回大会(令和5年度春季)

新潟青陵大学(中野啓明)

○第102回大会(令和5年度秋季)

宮崎大学(椋木香子)

【令和6年度大会計画】

○第103回大会(令和6年度春季)

横浜商科大学(東風安生)

○第104回大会(令和6年度秋季)

静岡大学(藤井基貴)

なお、令和7年度以降の春季大会、秋季大会の会場は未定となっております。企画運営委員会までご連絡ください。

② 学会活動活性化について

「次世代育成」WG報告では、学会大会についてのいくつかの提案をいただいております。例えば、ラウンドテーブル等の企画、大会に結び付くような課題研究等です。令和4年度から新たに設けられる「次世代」育成委員会等と連携しつつ、学会活動を活性化していきたいと考えております。

③ おわりに

近年の感染症パンデミックを背景に、激動の社会変革期を迎えました。また、Society5.0に向かうデジタル化は、教育界にGIGAスクール構想に伴う新たな授業形態を創出しました。学会においても、ハイブリッド型の研究大会開催は、新時代の課題の一

つといえます。地方在住会員の参加費の軽減、子育て・介護中会員の参加機会の保障、環境保全(カーボンニュートラルの推進)等、優しい学会となるように、会員の皆様と共に考えていきたいものです。

(毛内、走井、白木)

研究委員会

学会員に寄り添う

研究支援を目ざして

研究委員会は、専門委員会として常設されて4年目を迎えました。今年度は澤田浩一副委員長、七條正典理事、杉中康平理事、柳沼良太理事と共に学会員の皆様の研究支援体制をしっかりと構築していきたいと考えています。

研究委員会では令和4年度事業として、①道德アーカイブ事業「道德実践事例原稿公募」と成果公表、②オンラインセミナーの通年的な開催を計画しています。

特に、オンラインセミナーは、学会に期待する学会員の多様なニーズを踏まえ、実践面と理論面の両面から継続的研究支援を推進していきたいと考えています。以下のようなプログラムの準備を進めています。その都度、会員の皆様には学会HPや開催フライヤー配布等で適宜ご案内したいと思います。

《オンラインセミナー等開催予定》

① 「論文執筆セミナー」

8月7日(日) 15時～16時半

② 「道德アーカイブ実践事例研究会」

10月2日(日) 15時～16時半

③ 「道德授業実践セミナー」期日未定

*近畿支部と共催開催の予定です。

④ 「道德教育研究セミナーⅠ」

8月21日(日) 14時より

⑤ 「道德教育研究セミナーⅡ」

3月11日(土)に「教科教育学コンソーシアム事業」と連携開催します。

(田沼 茂紀)

広報委員会

広報委員会は、本年度より新メンバーで進めて参ります。どうぞよろしくお願ひします。

●会報は、年間4回程度の発行を基本としますが、令和4年度は発行時期を考慮し、3回とします。

●第72号までの紙面のよさや連載記事を引き継ぐとともに、新たな内容も取り上げ、道德教育の方向や環境の変化にも柔軟に対応します。

●HPにいずれ掲載できる情報になるよう、その著作権等の学会帰属等を確認しながら、Webでも提示できる広報誌にします。(島 恒生)



西村茂樹著「日本道德論」を

現代語訳した倫理学者

尾田 幸雄

戦後のわが国の道德教育の復活、推進に情熱を注いだのが、カント哲学の研究者、尾田幸雄である。

尾田の経歴は、一九三〇年生まれ、一九五二年東京大学倫理学科を卒業、その後、東大助手を経て、お茶の水女子大学助教授、教授(名誉教授)を歴任した。この間、文部省視学官や学会副会長等、研究活動に力を注いだ。著書は膨大で多岐にわたり、主なものに、『倫理学』(学陽書房)、訳書『カント「徳論の形而上学的基础論」(理想社)、等、共著を含むと多数に及ぶ。

尾田の活動は多岐で広範に及ぶが、殊に思いの強いのが、「日本道德学会」であった。また、研究会等で全国を駆け巡り、指導や講演活動を熱心に行った。病後でも、道德教育にかかわる研究活動に情熱を注ぎ込んでおられた。筆者にとっては、師であり先生であった尾田先生の姿が、目から離れない。

本会報の連載の「日本の道德教育への提言」シリーズの一号に、当時の尾田副会長からの提言「人間としての在り方生き方教育の充実を求めて」がある。それを紹介する。

戦後の道德教育を名実ともに支えてきたのが、昭和三十一年二月に結成された

日本の道德教育を築き上げた人々[75]

日本道德教育学会です。

昭和三十三年一月に第一回の全国大会を日本大学講堂で開催し、一千名の参加者を集めた。小中学校で「道德の時間」が始まる八か月前のことです。

発足当時の道德の内容項目が、羅列的で系統性に欠けるとか、小・中連携は掛け声だけで実質が伴っていないといった批判は、その後の改善努力によって聞かれなくなりました。さらに、文部省の『心のノート』は、我が国の道德教育の成熟ぶりとし小・中連携の緊密化を実証しています。

では、本邦の道德教育は、現在順風満帆かと言えば、残念ながら、必ずしもそうとは言えません。

確かに、小学校における児童の道德性を「他律から自律へ」と発達を促す指導、中学校における人間としての生き方についての自覚を深める指導、いわゆる四つの視点によって整理され一貫性を与えるようになったことは高く評価されてよいのですが、それだけ一層、高等学校における道德教育の不備が目立つ結果となっています。

教育活動全体を通じて行われる高等学校の道德教育の焦点の一つである公民科の中の「倫理」は選択科目の一つに過ぎませんが、構造上の不備は否めません。高校「倫理」の必修教科化とその内容の充実が望まれます。

最後に、業績の一端を挙げる。

- 西村茂樹『日本道德論』の現代語訳『品格の原点』小学館(二〇一〇)
- 尾田幸雄監修『日本人の心の教育』官公庁史料編纂会(二〇〇八)

(元開志学園高等学校 廣川 正昭)

道德教育研究・実践の探訪 研究室編

大阪体育大学教育学部 高宮 正貴

道德的諸価値の理解とは何か

現在遂行中の研究課題を紹介したい。① 道德的諸価値の妥当性の検討

内容項目に含まれている道德的諸価値をいかに正当化できるのか。この問題を、英国のカント主義哲学者オノラ・オニールの『Towards Justice and Virtue (正義と徳に向けて) 未邦訳』という著作に依拠して取り組んでいる。

オニールは、①「複数性」②「結合」③「有限性」という人間の基本的条件をもとに、「普遍化可能性」によって「正義」と「徳」を正当化する。徳のリストとして、勇気、自律、連帯などの全ての人に共通の徳目に加えて、「人生の特殊な段階・地位に関わる徳」、つまり「家族と家庭、学校と仕事、友情と土地」などの特殊な人間関係に関わる徳が挙げられているのは興味深い。

家族愛を道德教育で扱うことがしばしば批判される。しかし、オニールによれば、家族とは、傷つきやすい人間同士が「連帯」するための一つの制度である。

①「内容項目の指導の観点の検討

日本学術会議報告「道徳科において『考え、議論する』教育を推進するた

めに」では、「道理ある不一致」を踏まえた道德授業のあり方が提言された。しかし、「道理ある不一致」のせいで、「手続きの道德性」、つまり思考や議論の方法のみが道德授業で重視されることには危惧を抱く。というのは、児童生徒に学んでほしい道德的価値の意味や成立条件(たとえば「心と形が一体」となった礼儀)を教師が把握してこそ、児童生徒の「深い学び」が可能になると思うからである。もちろん、教師による道德的価値の把握は「指導の方向性」であり、その把握を「押し付ける」わけでも、「教え込む」わけでもない。拙著『価値観を広げる道德授業づくり』(北大路書房)でこのことを詳述したので、参照を請いたい。

しかし、「道理ある不一致」を前提にするならば、教師が道德的価値を把握する際、対立し合う価値理解も含めて多面的に行っておく必要がある。そのためにも、『学習指導要領解説 特別の教科道徳編』「内容項目の概要」の道德的価値についての説明を、「不一致」を踏まえた内容に修正する必要がある。たとえば「思いやりの心は、単なるあわれみと混同されるべきものではない」という中学校『解説』の記述は、「あわ

れみ」の感情を重視する近年のケア倫理の立場からは疑問視されうる。

③ 道徳的判断力を育む授業づくり

最後は、「道徳的判断力」を育む授業づくりの研究である。足立区立足立小学校の杉本遼教諭との共同研究である。

アリストテレス『ニコマコス倫理学』の「思慮深さ(フロネーシス)」論と村上敏治『道徳教育の構造(明治図書)』をもとに、道徳的判断力の構成要素(次のA・B・C)を抽出し、教材を活用した発問づくりを行っている。

A「何」…道徳的価値の意味、成立条件
「親切とは何か」「親切であるためにはどんなことが必要か」など。

B「なぜ」…道徳的価値の意義(理由、効用・目的)
「親切にすることはなぜ大切なのか」「親切にするのは何のためか」など

C「どのよう」…個別の状況下(特定の対象・相手・方法・時)での価値理解の適用の是非・あり方
「親切にすべきでない相手は誰か」「○○の場合には、なぜ親切にできないのか」など。

これらの発問を授業内でのように構成し、児童生徒の反応をもとに問い返すことで道徳的判断力が育まれるのか。実践を踏まえた検証を行っている。

私の実践 サーチライト型道徳

岡山県瀬戸内市立国府小学校 尾崎 正美

楽しくそして深く考え学ぶ道徳の授業を目指して、これまで自己の授業改善に取り組んできた。授業づくりは一つの課題を解決したら、また新たな課題が出てきて…と、恐らく探求は終わることはないのだろうが、それはそれで楽しい。最近、楽しい授業ができた。実践を重ねるごとに、更新されていくのであろうが、目指す授業に現時点で一番近いと考える授業実践をこの場をお借りしてまとめてみたい。

私は自分の目指す授業を「サーチライト型道徳」と名付けている。子供が自分でサーチライトを持ち、生き方を照らし考えていくイメージの授業である。その特徴は、次の四点である。

- ① 自己の生き方に関する課題について導入と終末で子供が自らに問う。
- ② 子供が学習のめあてを立てる。
- ③ 教材の登場人物の生き方を自分とのかかわりで考える。
- ④ 今の自分に必要だと思う考えを選ぶ。

この中でも、大きな特徴は①である。小学四年生「節度・節制」の授業実践(教材「目覚まし時計」)で説明する。

導入で、自分でできちんとした生活を続けることは難しい時もあると子供が

自己の生き方の課題を把握した後、「自分でできちんとした生活を続けるために大切な心は何だと思う?」と問いかけた。自分が大切に考えていることは何なのかという問いを自己に投げかけることが、サーチライトの一つである。結果、三十四名中十五名が「わからない」と答えた。「わかりそうでわからない」という答えもあった。自己の内面にサーチライトを当てたから、わからない自分がいることにも気付けた。答えを書いている子供は、「努力」「自分に自信をもつ」「大人になったら後悔しないようにと考える」「心をおににする」など、その時点で自分が大切だと考えることを書いた。そして、「わからない」人がいたことを共有すること、みんなでのこの答えを探していきたいという思いをもった。答えを書いていた子供にとっても、「みんなで考えることで、さらに考えを深める」という意識のもと、探求意識が成立した。その結果、「自分でできちんとした生活を続けるために大切な心を見つけよう」というめあてが決定した。

展開では、教材の主人公の生き方を自分と重ね合わせて考えることを重視した。例えば主人公の多様な心情につ

いて「面倒だという主人公の気持ちわかるかな?」や「もし自分だったらどう考えて甘い心に負けないようにしたいなと思うことある?」と問いかけながら、常に自分の内面をサーチライトで照らしながら見つめることを促した。互いの考えの共有を経て、今の自分に必要だと思ふ考えを選ぶというサーチライトを使った。自分自身に問いかけて選んだ答えだから、考えを全員でそろえることはしない。

そして、終末でもう一度「自分でできちんとした生活を続けるために大切な心」を問うサーチライト。すると、十三名の子供がなんらかの答えを書いた。導入で自分の考えを書いていた子供は全員、導入時とは異なる考えを書いていた。同じ問いをすることにより、子供自身にもこの時間の自分の学びがはっきりと見えたようだ。「さいしょはわからないって書いたけど、大切なことは決めたことは守らないといけないと思いました」と書いた子供がいた。

わからなかったことがわかり、自分の言葉で表現できたというのは喜びである。その時その時の自己をサーチライトで照らし、自己に問い続けていく。そんなサーチライト型道徳をこれから実践し改善していくことを楽しみにしている。

シリーズ日本の道德教育への提言

GIGAスクール時代における 新しい道德科授業モデルの必要性

中野 啓明

GIGAスクール構想が本格化し、全国の小中学生に一人一台端末の時代が到来して一年が経過した。

こうしたGIGAスクール構想が進行する令和三年一月、中央教育審議会においては、「令和の日本型学校教育」の構築を目指して、全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現（答申）を取りまとめた。

ここでいう「個別最適な学び」とは、従来からも教師の視点からいわれてきた「個に応じた指導」（指導の個別化）と「学習の個性化」を、学習者の視点から整理し直した概念であるといえる。

一方の「協働的な学び」について、答申では、「『個別最適な学び』が『孤立した学び』に陥らないよう、これまでも『日本型学校教育』において重視されてきた、探究的な学習や体験活動などを通じ、子供同士であるいは地域の方々をはじめ多様な他者と協働しながら、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるよう、必要な資質・能

力を育成する『協働的な学び』を充実することも重要である。」と指摘している。

こうした「個別最適な学び」と「協働的な学び」は、一見すると、従来から日本の教師が大切にしてきたことを強調しているように見えるかもしれない。

しかし、今や一人一台端末が前提となり、子ども達は学習ツールとして「いつでも」「どこでも」タブレット端末等を使用可能な状況となっているのである。このような学習環境の変化は、道德教育や道德科の授業に、どのような変革をせまっているのだろうか。

特に、「個別最適な学び」に関していえば、「学習履歴（スタディ・ログ）」などのデータを蓄積するとともに、これを分析し、利活用していくといった方策が求められている。では、道德科の授業の場合のデータとは、何を意味するのであろうか。また、「協働的な学び」に関しても、道德科の授業の中でタブレット端末等をどのように活用していけばよいのであろうか。

道德教育においてリアルな体験を一層充実するだけでなく、タブレット端末等を活用した場合の新しい道德科の授業モデルの構築が必要である。

（新潟青陵大学）



会員の声（私と学会）

持続可能な学会を目指して
〜キーワードは「つなげていくこと」

醍醐 身奈

コロナ禍の影響によって、人と人が新しくつながったり、既存の関係を維持したりするのが難しい時代になってきている。このような状況下でも私は、次にあげる二つの経験を通じて、「つなげていくこと」の大切さを実感することができたように思う。

一つ目は、地域とのつながりから学んだ経験である。所属研究所が東京都品川区にあることが契機となり、コロナ前から様々なプロジェクトを通じて地域住民やNPOの方々と一緒に活動することが増えてきていた。その企画の一つに、地元小学校での市民科（※）の授業に学生を連れて出前授業をする計画があった。しかし、この出前授業もコロナの影響で中止となり、子どもたちと会えるのを楽しみにしていた学生も非常にがっかりしていた。

（※「市民科」とは、「特別の教科 道德」、特別活動、総合的な学習の時間を統合・再構築した品川区の独自教科であり、義務教育9年間を通じて市民として資質・能力を育むことが目指されている。）

それから数か月たったある日、小学校の先生から「ZOOMで出前授業をしてくださいませんか」と連絡が入った。最初は戸惑いもあったが、実際に授業をやってみると小学生と大学

生が目を輝かせて互いに学ぶ姿を目の当たりにすることができた。つながりを絶やすまいと尽力してくださった先生方の思いに感動しつつ、ICTの活用による新たな活路を見出した瞬間でもあった。

さらに、この実践は先生方のご協力を得て、「市民科と道德・SDGsの繋がりーICTを活用した小大連携教育の実践を通してー」というタイトルで本に掲載されることにもなった。積み重ねてきた実践を形として残せたことは、次の研究への大きな一歩につながった。

二つ目は、本学会とのつながりから学んだ経験である。2021年、学会が主催する「次世代育成WG」のメンバーの一人として会に参加させていただく機会を得た。WGには若手研究者や現場教員の数名が集められ、「次世代育成」を行うことを目的として、学会の「当たり前」を問い直し、近々にやるべきことを具体的に提案していくことを行っていた。ここでは、はっとさせられるような斬新なアイデアや意見が飛び交い、あらためてつないでいくことの難しさを実感する場にもなった。

本学会も、今秋でいよいよ第100回大会をむかえることになる。私自身も、ここであげた二つの経験をいかしながら、次世代に「つなげていくこと」を意識した持続可能な学会活動を展開していきたいと考える。

（慶應義塾大学SFC研究所）

道德授業実践講座
竹内善一先生の巻①
教育の成否は教師の資質にあり

人材の育成

「国家百年の大計は教育に在り」と言われる。まさに国家の存亡は教育にかかっている。日清戦争後、清国からの巨額の賠償金を各省に分配することになった。各大臣が首相官邸に呼ばれた。文相樺山資紀(海軍大将)が文部省を出ようとすると文部次官澤柳政太郎が「是非今日の会議で半分は文部省に貰って下さい」と言う。大変な額である。大臣がその訳を聞くと、「次の相手はロシアです。とても、四力年の義務教育ではダメです。六力年までの義務教育にしとかねば勝てませぬ」と。

樺山大臣は官邸に着くなり、半額をくれと申し入れた。皆がその訳を話せと言う。大臣は「小学校の先生方にある」と、もし貰えなければ大臣を辞めると申され、文部省に半額を貰われた。義務教育は六年制になり、国民の教育水準は高まり、日露戦争にも勝利した(注一)。教育の力が国難を救った事例である。

教育は国家の最重要政策である。国づくりの基盤は人づくりから始まる。人材の育成こそ国や社会を動かす原動力である。いかなる人間を育てるかが問われている。その人材育成を担っているのが教師である。教師の使命は崇

高で尊いのである。卒業式に「仰げば尊し我が師の恩」と歌われた。

期待される教師像

現在ほとんどの学校が「仰げば尊し」を歌わなくなった。理由はともかく教師に対する尊敬の念が薄れつつあるように思う。かつては聖職者として子供や保護者から信頼される存在であった。

最近、国民は教師をどのように見ているのだろうか。新学期が始まると子供や保護者は誰が担任になるのか気になるのである。誰が担任になっても同じではないかと思いたい。それが必ずしもそうではないことを子供も保護者も知っている。子供や保護者にとって担任の「当たり外れ」は一番の関心事なのである。

教育世論調査の結果からも分かるように国民が一番関心を持っているのが教師の資質や人間性である(注二)。教師はこうした世間の声に謙虚に耳を傾け精進することが求められる。世間が求める教師像はどんな教師像なのか。世論調査から教師への要望の多い順に幾つか挙げてみよう。「誰にでも信頼される人間的な魅力」「児童・生徒への愛情」「教育に打ち込む熱意」「児童・生徒を包み込む包容力」「教育者としての信念や職業倫理」等である。こうした国民の声は教師に何を期待しているのか理解しなければならぬ。

脚下照顧

『二宮翁夜話』に次のような話がある。尊徳の愛護を受けて子供たちに儒学を

教えていた儒者が、ある日、大酒を飲み酔って道端に寝て、醜態をさらした。これを見た子供が翌日から教えを受けなくなった。儒者は怒って尊徳に「私の教えているのは聖人の書です。どうかあなたから説諭して、また勉強に來るようにしてください」と願った。

尊徳は例えを以って儒者に言った。「飯を炊いて糞桶に入れたら、あなたは食べるか。元は清浄な米飯である。ただ糞桶に入れただけだ。しかし、これを食べる者はいない。あなたの学問もこれと同じだ。元は立派な聖人の教えであるが、あなたが糞桶の口から講説するから子供たちは聴かないのだ。」儒者は非を認め尊徳に感謝して去って行った。尊徳が言いたかったことは単に知識を授けるだけの道学者では駄目である。聖人の教えを自ら実行しなければ学ぶ意味がないことを諭したのである。教育にとって教師の感化力が如何に大切であるかを示したものである。

子供のために教育技術や指導力を磨き、学力を向上させることは結構なことであるが、教育技術に関心が向き過ぎ、教師としての人間性を磨くことが疎かになっていないか自分を見つめ直すことも必要である。

(注一)小原國芳著『師道』玉川大学出版部八〇、八二頁参照

(注二)読売新聞「学校教育全国世論調査」昭和六十年以降の調査結果を参照(元鳥取大学)

編集後記

第1号の広報委員は、以下の先生方でした。(敬称略、所属は当時)

◎廣川正昭(開志学園高校)

竹内善一(鳥取大学)

小野スミ子(道都大学)

永田繁雄(文部科学省)

なかでも、廣川先生におかれましては、第1号から第72号まで、ずっと広報委員長を務め、ご尽力くださったことには、頭が下がる思いです。心から感謝申し上げます。

この間、「巻頭言」「文科省の動き」「学会ノート」「研究大会の紹介」「本部からのお知らせ」「シリーズ日本の道德教育への提言」「支部活動の紹介」「日本の道德教育を築き上げた人々」「スポーツ」「トピックス」「会員の声」「図書紹介」など、会員に有益かつ多彩な内容を工夫し、掲載されてきました。

なかでも、「日本の道德教育を築き上げた人々」は、「戦後の道德教育」も含め74回の連載。取り上げた人物は重複を含め71人にも及びます。

これらの財産や偉業を引き継ぎ、第73号から新メンバーで進めて参ります。廣川先生には到底及びませんが、どうぞよろしく願います。

(広報委員)

